

## 沖縄「5.15平和行進」

沖縄が日本に復帰して6月15日で46年を迎えました。6月11日から3日間、宜野湾海浜公園をメイン会場に「平和と暮らしを守る県民大会」が行われ、国内外から約3,500人（日教組72人・高教組2人）が参加しました。1年めの学習会、2日めの平和行進、3日めのフィールドワークをとおして、「基地なき平和な沖縄を」と訴え、過重な基地負担の解消や平和憲法の維持などを求めました。3日間の行進には、県内外から延べ5,400人が参加しました。

### 参加者の感想

宮古商業分会 佐藤 藍

今回、沖縄平和行進に参加させていただきました。

初日の学習会では、米軍ヘリからの落下物があった緑ヶ丘保育園の園長先生、保護者会の代表の方々からお話を伺いました。「普通のお母さん」であった保護者の方々が、子どもたちが安全に暮らせるよう行動を起こしていった過程、「自分の子どもの命を守りたい」という願いを、生の言葉で伺うことができました。

2日目の平和行進は、沖縄県南部の平和祈念公園からスタートし南風原町役場までの約17kmのコースを歩きました。曇りで時折雨のぱらつく中、戦没者の方々の名前が刻まれた碑を背に出発しました。次第に陽が射ってきて、沖縄らしい造りの民家や、畑や丘陵の向こうに青い海を臨む美しい風景も見ることができました。しかし過去にここは激戦地で、多くの命が失われた場であるのもまた事実であり、今私たちが歩いている場所を様々な思いを持って行き交った人々がいたことを考えながら、歩みを進めました。

行進の途中、地元の方々に激励をいただく場面もありました。その中には、軒先に立ち、涙をぬぐいながらこちらに手を振っていた年配の女性もいらっしゃいました。

最終日は、沖教組顧問の山本さんに案内していただき、普天間基地や嘉手納基地、米軍上陸の地である読谷村を経由し、2つのガマを見学しました。

日曜日であったためか基地から飛び立つ機体等は見受けられず、実際の音がどのくらい生活に影響を与えるのか実感することはできませんでしたが、人々が生活する場の驚くほど近くに、普段の私たちからすれば「非日常」である米軍基地が存在していました。地元の人々にとって

は、これが今の「日常」であることを改めて感じさせられました。

ガマ見学では、シムクガマの中に実際に入り全ての灯りを消して話を聞く、という体験をしました。一度に千人ほど入れるという巨大な鍾乳洞の暗闇の中で、ぎりぎりの命の選択を強いられた人々がいたことに衝撃を受けました。



平和行進のようす



集会でのアピール